

歴史を学ぶ意味ってなんだろう??

～『ペリー提督は吉田松陰を絶賛していた一原典で読む外国人が見た日本一』より～

一般社団法人第二のふるさと創生協会代表理事

瀬田玉川神社禰宜 高橋 知明

今を生きる意味!?

神道には「中今（なかいま）」という言葉があります。神道の世界ではよく用いられる言葉ですが、過去から未来へと流れている時間の一部を指します。今、私たちが生きているまさにこの瞬間が「中今」ということになります。

神道では、江戸時代の国学者である本居宣長(もとおりのりなが)が『古事記伝(こじきでん)』の中でそのことを述べています。過去、現在、未来という時代の流れがあって、我々の祖先から引き継いできた大切な命の繋がりというものを考えながら、その命は決して自分一人の命ではなく、自分一人で生きているものではないという考え方です。私たちは、「今の時代を生かされている。そしてその生かされている時代を一所懸命に全力尽くして生きていく」これが神道の根本的な考え方と言えます。過去のことも、未来のことも、いろいろと思ったりしますが、それよりも「今のこの瞬間を精一杯生きていく」ということが、神道の真髄ということだと思います。

すなわち「中今を生きる」とは、「感謝の気持ちを大切に一所懸命生きること」と考えます。そうであるならば、この一瞬をしっかりと捉えて自分に忠実に生きたいもの。そうした考えを持つことも歴史を学ぶ意味の一つかもしれません。

また、自らが今抱えている、或いは将来抱えるであろう課題を解決に導くために、効率的かつ有効的な手段を得ることも、歴史を学ぶ意味の一つかもしれません。ローマの歴史家クルチュウス・ルーフスは「歴史は繰り返す」という言葉を残しましたが、なるべく悪い歴史を繰り返さずに、良い歴史を重ねるためにも、良し悪しを含めて先人たちの足跡を学ぶことは大切なことだと思います。“学びとはアウトプットのためにあるもの”。受験勉強であれば、“インプット＝学び”のようなイメージが強いですが、本来学ぶことは楽しいことです。自らが学びを得たことを、いかに社会全体の幸せのために活かしていくのか、そこに学びの意味の一つがあると考えます。歴史だけでなく、数学や科学、芸術やスポーツでも、一見全く異なった分野のように見えますが、全て人間の営みの一部です。分野は誰かが物事を整理しやすくするために設けたもので、全ては繋がっています。どの分野の学びを深めようとも、その学びの最大の目的は、世界平和のためにどう活かすかということであってほしいと考えますし、そう意識すると学びがより意義深く、楽しいものにもなるのではないのでしょうか。

歴史の事実って、一つしかないのに

さて、私は『ペリー提督は吉田松陰を絶賛していた一原典で読む外国人が見た日本一』（育鵬社、令和5年版）という一冊の本を出版しました。歴史事実というものは一つしかありませんが、各々の人の見方や

解釈、記録の残し方によって、時には事実が捻じ曲げられて伝わったり、間違った解釈が流布する危険性もあります。それも含めて歴史という考え方もあるかもしれませんが、最近では、ネット社会におけるフェイクニュースというのも大きな社会問題の一つになっていますので、気を付けたいものです。

そうした過去の事実を知る上で、いくつか意識しておきたいことに、歴史に登場する数字の正確性の検証があり、また、歴史を学ぶ時には、過去の人がどうしても自らに都合の良い様に書き残したいという意図のある文献なども多くありますので、なるべく関連する多方面の資料や取材から分かる人々のお話や言い伝えなどを集めて、より事実にとどり着くよう努力することも意識しておきたいところですね。

第三者視点から歴史を見てみる

この『ペリー提督は吉田松陰を絶賛していた一原典で読む外国人が見た日本一』は、来日した外国人たちが、第三者の視点から日本という国や日本人の姿を、率直にどう思ったのかを紹介したものです。歴史について、日本人が日本の過去の出来事などの考え方を論じると、必ずそれは保守、中道、リベラルとどれかに他者からカテゴライズされます。メディアを見ていてもそうですが、論じる人も、それを批評する人も、自分は中道だと思っているところが人間社会の常です。

本書の概要ですが、幕末の開国以降、政治家や軍人、商人や冒険家など、たくさんの外国人が日本にやってきます。当時の世界は、欧米諸国がアジアやアフリカ、北南米などを競って植民地化し、非文明国と見なしてその国々の利益を搾取していた時代です。当然、西欧から見て東の果てにある日本も、非文明国だと思ってやってきた外国人も多くいますし、彼らのそうした見下した態度が綴られた記述も多くあります。

しかしながら、いざ日本に来てみると、自然と人々との調和した美しい生活風景はもちろんのこと、日本人の礼儀正しさや立ち居振る舞い、生活の清潔さや治安の良さ、世界に類を見ない教育水準の高い子供たちや大人たちの姿など、絶賛せざるを得ないことが山ほどあり、多くの外国人がそのことを記述しています。

今回は、幕末から昭和の時代にやってきた25人の外国人のそうした証言を一冊にまとめましたが、明治中期以降になってくると、日本人以上に日本のことを理解し、的確な表現をする外国人も現れます。この本にも登場するラフカディオ・ハーンやヴェンセスラオ・デ・モラエス、ブルーノ・タウトなどはその代表格とも言えますが、日本人が日常生活に溶け込んで当たり前に行っているが故に、その道徳性や美的感覚の素晴らしさに気付かないことを、彼らは第三者視点から豊かに表現しました。その記述を通して多くの世界の人々が日本への憧れを持ち、“ジャポニズム”は単なる流行に留まらず、現代でもそれを求めて日本にやってくる外国人観光客も多くいます。

国際教養人として世界平和を実現するために

こうした私たちの祖先の美しい姿は、現代の私たちのDNAにも受け継がれ、しっかりと息づいています。そのことを私が感じたのが、東日本大震災の時の多くの国民の立ち居振る舞いでした。“人は、ピンチの時に理性と本性が出ます”。震災直後、多くの国民は理性に基づき行動しました。このことは誰からも教えられたわけではないのに、ごく当たり前のこととして、助け合い、協力し、我慢して国難を乗り切ろう

という国民性が現れた瞬間だと感じています。まさに、白人による人種差別との闘いであった明治維新のように、国民が一つの目的のために一つになった瞬間でした。

私は、こうしたピンチの時でも本性に従わず、理性に基づき行動が出来る日本人は、これからの世界を救う鍵を握っていると感じています。そもそも災害大国に生きてきた日本人のわびさび、はかなさ、せつなさ、覚悟のような精神性が、『中今』を一生懸命に生きる心に繋がるものと思いますし、さらには自然と人との共存共栄を実現してきた日本人が、これからの世界に貢献すべき精神だと感じています。この精神性は、武士道や茶道・華道などにも表現されていますが、その根底にある精神が“神道”です。

決して驕り高ぶるのではなく、自らが持つ素晴らしさと使命に、多くの国民がなるべく早く気付いていただき、崇高なる精神のもとに、世界の平和のため幅広く多方面で活躍してほしいと思っています。また、世界の国々の伝統文化や価値観を認め合いながら、共存共栄を追求していく国際教養人として活躍するために、自らの国の正しい歴史を、もっともっと知ってほしいと思っています。

そうした願いから、本書を出版しました。

最後に、私は「和の心」と「鎮守の杜づくり」が、世界を救う鍵を握っていると感じ、行動しています。ぜひ皆さまとも、共に考え、共に学び、共に行動していく仲間でありましょう。

(令和6年8月寄稿)